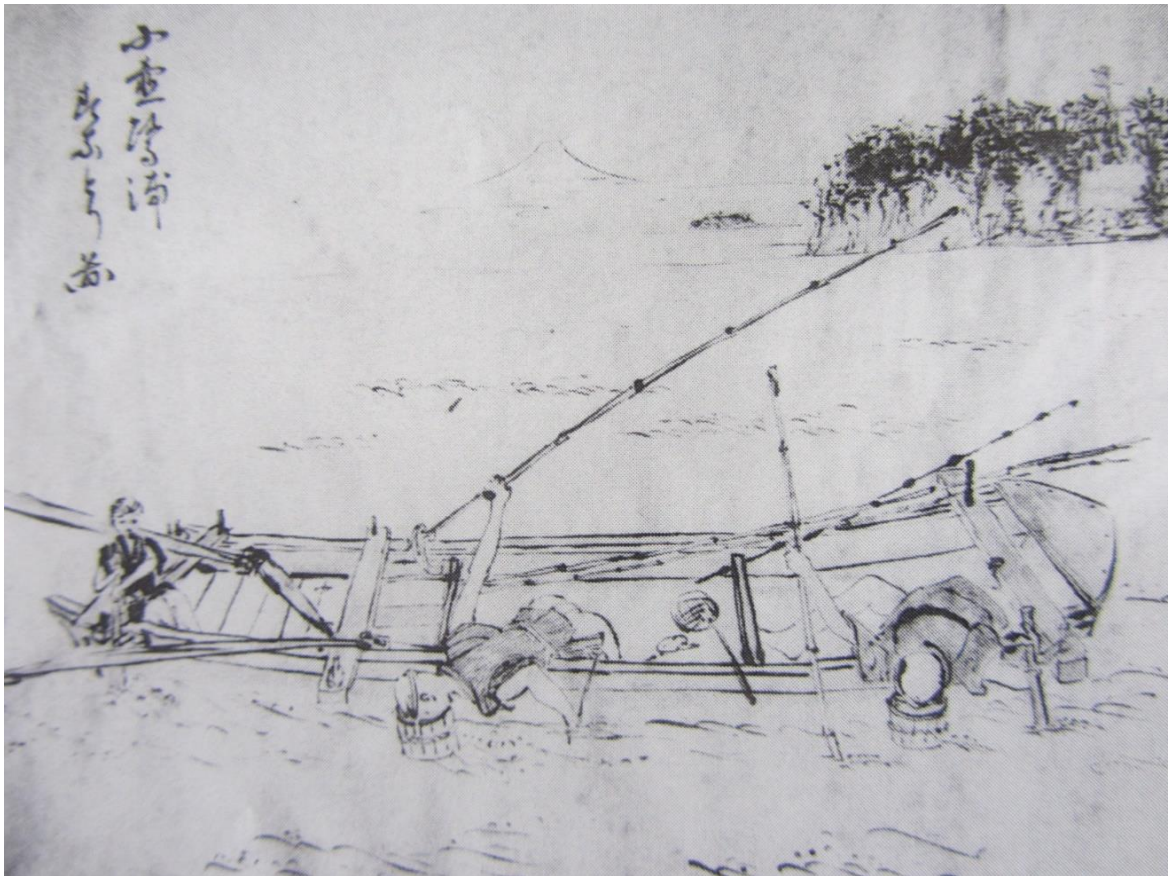


海のくらしと道具

小坪小学校資料室にある漁労具

池子遺跡群から出土した古代の漁労具



小坪鷺浦でのぼうちょう漁の図

逗子市教育研究相談センター

も く じ

網漁の道具 3

シラス網 エビ網 イワシ網 ダイワ タモ網 アバ
イヤ

釣り漁の道具 5

釣り針 イサキ用しかけ アジ用しかけ イナダ用しかけ
ヒラメ用しかけ マダイ用しかけ イカヒキしかけ
アンドンビシしかけ イカヅノ タコテンヤ カットウ
ナワバチ

突き漁の道具 8

ツキンボ漁とその道具 見突き漁とその道具 カガミ・箱めがね
フシ アワビオコシ スカリ サザエフシ ワカメガマ

ツボ・カゴ漁の道具 12

タコツボ アナゴ筒 バイカゴ

その他の道具 13

スズ コバコ ノリ干し用スダレ・タタミイワシ用スダレ
カグラサン ツム アンバリ テンビン棒とカゴ ビク
イケス ガラス玉

祈る・祝う 16

マイワイ

池子遺跡群資料館にある弥生時代の漁具 17

釣り針 モリ 回転銚頭 アワビオコシ 石錘 櫛状製品
魚類 貝類

小坪の漁業あれこれ 19

漁師の守り神（龍宮社）
小坪海岸の移り変わり
江戸時代から明治時代にかけての漁法
小坪で行われている漁

わかめ漁

海のくらしと道具にまつわる話 23

セーリョ師 - 釣りの名人

ガラスめがねと船戦

池子遺跡

回転離頭銚とその系譜

参考文献 28

この本で調べるみなさんへ

この本にのせられている漁具は、小坪小学校の資料^{しりょうしつ}室や池子遺跡群資料^{いけごいせきぐんしりょうかん}館にあるものです。道具の中には、現在^{げんざい}は使われなくなったものも多くあります。しかし、その漁具などをよく見てみると当時の人々の知恵^{ちえ}や工夫^{くふう}が分かってきます。ぜひ実物を見たりふれたりしながら、使い方を考えてみてください。そして貴重^{きちょうぶんかざい}な文化財として大切に守り残して行って下さい。

なお、この本の中の漁具の一部は、残念ながら現在では失われて見られないものも含まれています。その漁具に関しては、「逗子市文化財報告書^{ずししぶんかざいほうこくしよ} 第15集 小坪の漁労具^{ぎよろうぐ}」にある写真^{ふくしや}を複写してのせてあります。

網漁

魚などをとる方法や道具は、魚の種類や地域によっていろいろありますが、網は最も基本的な漁具のひとつで、使い方も「すくう」「かぶせる」「引く」「巻く」などの方法があります。材料は、麻、木綿などですが、現在は化学繊維になっています。網漁で使う網には、とらえる魚などの大きさや種類によってさまざまなものがあります。

船引き網漁

船引き網は、海中に袋^{ふくろ}になっている網を入れて引っぱり、船の上にあげて魚をとる網です。形は、1つの袋に2本の長い腕^{うで}がつき、それぞれのはしに引き網がついています。魚の群れ^むを探し、群れを取り囲む^{かこ}ように船を走らせて魚を追いかんでとります。

刺し網漁

刺し網とは、魚の泳ぐ道のある海中に、垂れ幕^{たまく}のように帯状^{おびじょう}に張り、魚などを網目にひっかけたりからませたりしてとる網をいいます。また、イセエビやアワビなどのいる場所に垂れ下げてとる時にも使われます。

海面近くに張る浮き刺し網^うや流し網^{なが}、海面と海底の中間に張る中刺し網、海底にふれるように張る底刺し網^{そこ}などがあります。

網は、上にアバ（ウキ）、下にイヤ（オモリ）をつけ、海中に垂直^{すいちよく}に立たせます。

網漁の道具

シラス網

シラス網は、小型の船引き網です。

とる魚によって大きさや網の目の大きさがちがいます。シラスは小さいので網の目も細かくなっています。



エビ網

刺し網の一種です。磯の棚にかくれているイセエビは夜間活動するので、磯棚の入り口に垂れ下げておくとその網にヒゲを突っ込み、動けなくなります。それを網ごと船に上げてからはずしてとります。エビの他に岩礁がんしょうにいる魚などもとります。



イワシ網

川魚漁で使用する四つ手網に似たもので、イワシ類などの小型回遊魚こがたかいゆうぎよをとります。四つ手網は、全国各地で船上や岸辺で行われる漁法です。十文字に組んだ竹ざおの先や綱つなで四隅よすみを固定して張った四角形の網を、水中につり下ろし、魚が入ったところをみはからって引きあげてとります。



ダイワ

エビ網などを漁場で使いやすくするためにたたんでのせておく道具です。網がからまらないように整えて入れておきます。わくは木で作られた曲まげ物で、底は竹を編んで作られています。地方によってさまざまな材料が使われています。



タモ網

網あみでとった魚や生け簀いすの魚をすくい上げるのに使った網で、「タモ」「タマ」ともいいます。



アバ

桐材^{きりざい}で作られた大型網用のウキです。

網の上の部分につけ、網が沈まないようにします。
漁法によって形や大きさがちがいます。



イヤ

網用のオモリで陶製^{とうせい}です。

網の下の部分につけて、網を立たせる役目をします。
陶製のほか、鉛^{なまり}製や石製のものもあります。



釣り漁

釣り漁^{つりりょう}は、大規模な装置^{だいきぼ そうち}がいらず、さまざまな自然環境^{しぜんかんきょう}の漁場で行うことができるため、古くは縄文時代^{じょうもんじ だい}から行われてきた漁法です。

一本釣り漁^{いつぽんづ}

1本の釣り糸に1個あるいは数個の釣り針をつけて魚を釣りあげる漁法をいいます。一本釣りは、魚の習性^{しゅうせい}や漁場に合わせてさまざまなしかけ^{くふう}が工夫されました。さお釣りは、さおの先に釣り糸と釣り針とおもりをつけて行います。手釣りは、さおを用いず1本の釣り糸、釣り針、おもりを用いて釣る方法で、手で釣り糸を持って行います。

引き釣り漁^{ひきづり}

引き釣りは、船から釣りざおなどを使い、釣り糸をのばして先につけた釣り針を船を走らせて引きながら魚を釣りあげます。引き釣りでは、主に疑似餌^{ぎじえ}（えさに見せかけた釣り針）が使われます。魚が泳いでいる深さに合わせて釣り針をひくため、ウキ（浮き）を使います。

はえなわ 延縄漁

延縄漁は、釣り針をつけた多数の枝縄^{えだなわ}を幹縄^{みきなわ}にむすびつけ、海中に水平にのばし、多数の魚を同時にとります。海面に近いところを泳ぐマグロなどをとる浮き延縄^{かいてい}や海底でヒラメやタイなどをとる底延縄^{そこ}などがあります。

釣り漁の道具

釣り針

釣り糸につけて水中にたらし、魚の口や体に引っかけて釣り上げるのに使われます。古くは縄^{じょうもんじ}文時代からシカの骨などを加工した釣り針が使われていました。

釣る魚によってさまざまな大きさや形のものがあり、しかけもとる魚の種類によってちがいます。

釣り針につけるえさには、生の魚介類^{ぎよかいりい}を使う場合と作り物の疑似餌^{ぎじえ}を使う場合があります。擬餌針（えさに見せかけた釣り針）は「ツノ」と呼ばれます。

イサキ用しかけ

小型の赤糸をたばねてつけた擬餌針^{ぎじばり}を使っています。



アジ釣り用しかけ



イナダ用しかけ

角^{つのせい}製、プラスチック製の擬餌針^{ぎじばり}を使い、浮上^{ふじょう}ウキをつけます。



ヒラメ用しかけ

イナダ用しかけとほぼ同じですが、ウキの形がちがっています。



マダイ用しかけ

エサにはイキイワシ，イキエビを使います。



イカヒキしかけ

アオリイカ専用の引き釣り用のしかけです。



アンドンビシしかけ

アジ・サバ用の漁具です。アンドンビシの中にコマセ（まき餌^え）を入れて魚をさそって釣ります。形が照^{しょう}明器具^{めいきぐ}の行灯（アンドン）ににているところからついたコマセカゴです。網目部分の下に鉛^{なまり}のおもりがついています。とる魚やコマセの種類によって網目の大きさがちがいます。



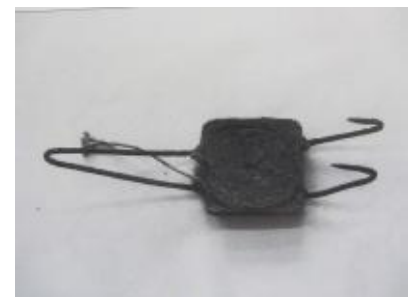
イカヅノ

スルメイカ・ヤリイカ釣りに用いる釣り針です。地方あるいは漁場によってさまざまな形のものが使われました。おもりとなる軸^{じく}の先にとがらせて折り曲げた針先を取りつけたもので，これを釣り糸に結びつけます。水中で動くイカヅノを獲物^{えもの}と見てよってくるイカを針先でひっかけて釣り上げるので擬餌針（えさに見せかけた釣り針）の一種です。



タコテンヤ

木やプラスチックの板に針とおもりが取り付けられたタコを釣るための道具です。板の部分にえさをくくりつけ，海底を引きずってタコをさそう釣り方が古くから行われています。



カットウ（サヨリ針）

サヨリという魚を釣るために作られた釣り針で、小坪では「カットウ」と呼んでいます。昔から漁師は、漁のために使う道具は自分で作りました。この「カットウ」もピアノ線を切り、先をみがいて作られています。他の釣り針とちがって碇の形をしています。これはえさをつけて釣るのではなく、



サヨリを引っかけて釣り上げるためなのです。このサヨリ釣りは、高い技が必要なので、サヨリを専門に釣る漁師（セーリョ師と呼ばれました）は、陸でわらをサヨリに見立て、引っかける練習を積んだそうです。

ナワバチ

延縄用の釣り糸を流しやすく束ねてのせるカゴです。ナワバチは、幹縄をカゴの中にまき、枝縄の釣り針をカゴのふちに回された縄にさしならべます。



突き漁

突きん棒漁とその道具

ツキンボモリ（突きん棒鉈）

ツキンボ漁（突きん棒漁）は、魚をモリで突いてとる漁法の一つで、大型の魚をとります。この漁に使うモリは、根元にツバメの尾のような「かえし」が作られています。このモリは、魚の体にささると柄からはずれ、「かえし」によって魚の体の中で回転し、ぬけなくなるよう工夫されています。



この形のモリは、縄文時代には動物の骨やシカの角で作られており、池子遺跡群では弥生時代のものが出土しています。たいへん長い歴史を持つ漁具といえます。この形のモリは「回転式離頭鉤」と呼ばれています。

見突き漁（ボウチョウ）とその道具

見突き漁は、船の上から水中をのぞき、貝や魚をフシと呼ばれる漁具で突き取る漁法です。

ボウチョウは、海底にいるアワビ・サザエ・クロダイ・ボラ・スズキなどの貝や魚を見突きの漁法でとるときに乗る船のことをいいます。

船の前の方（舳先）のことをヘノケといい、ここで1人が櫂ををこぎ、船の後ろの方（船尾）でもう1人が櫓をこぎます。そして真ん中にモリを使って漁をする人が乗り、カガミ（箱めがね）をくわえ、7～8 mもあるモリを使って貝や魚をねらいます。

また、ぼうちょうには、1人で乗ることもあり、その場合は片手に櫂、利き手にモリを持って漁をします。ぼうちょうに乗る見突き漁は、むずかしい技がいる漁で、漁師の腕の見せ所でもありました。

現在は、船の先の右側で箱メガネをつけて漁をします。左手に短い櫓を持ち、右足には船のエンジンのクラッチとつながっている棒をつけ、左足は自分の体をささえ、右手で長い棒の先についた道具でサザエ・アワビ・天然ワカメなどをとります。



小坪の丸木舟（昭和 31 年）



現在の見突き漁

カガミ・箱めがね

箱形あるいは桶形おけの底そこにガラス板をはった箱めがねです。磯などで海中をのぞきながら、アワビやウニ、ワカメ、魚などをとる見突き漁みづりょうに使われます。口にくわえたり、ベルトをつけて顔に固定こていしたりして使います。これが広まってきた明治20年代以前は、油を海面にたらしたりぬかを吹きつけたりするなど、海中が見えるようにして海中をのぞきながら漁をしました。



使われる地域ちいきによってさまざまな形の箱めがねがありますが、写真のものは小坪で使われていたものです。めがねを顔に固定こていさせるため、ゴムがついていますが、箱の真ん中に棒ぼうをつけて歯でくわえて固定するように作られたものもあります。

フシ

木や竹の柄えの先に鉄製の1～4本に先分かれしたすどくどがった穂先ほさきをつけた漁具をヤスといいます。小坪を含めて三浦半島ではヤスのことをフシと呼びます。柄を手に持ち、水中の魚や貝に突き刺してとらえる道具です。

フシは先分かれの数によって、三本フシ、四本フシなどと呼ばれますが、小坪ではおもに三本フシが用いられました。明治時代のフシは「バラブシ」といって1本1本のフシをいっしょにたばねて3本にしたものでした。後に溶接技術ようせつぎ じゆつが進んで、現在のような三本フシになりました。

バラブシは、自分で使う見突き漁師が組み立てました。この組み立てがうまくできないと一人前の漁師とはいえなかったといえます。



バラブシ

アワビオコシ（アワビカギ）

見^み突^つき漁^{りよう}でアワビをとるのに使った道具です。

先の部分をとがらせた鉄^{てつ}製^{せい}のかぎで、長い竹^{たけ}竿^{ざお}などに結^{むす}びつけて使い、海中^{いそ}の磯^{いそ}についているアワビをかぎで引っかけ、はがしてとります。

アワビをとる場合、肉の部分にカギの先をくいこませ、そのまま船へあげることもできますが、いったん磯からはがし落としたときには肉の部分をさらに引っかけて取りあげなくてははいけません。しかし、この方法ではアワビに傷^{きず}がついてしまいます。そこで、スカリというアワビ入れのタモ網^{あみ}をつり下げて、はがしたアワビを間合いよくスカリで受けたり、網につけたおもり（かわらやコンクリートのブロックを使ったりする）にアワビをつけさせてあげたりしました。



スカリ

タモ網の一種で、とったアワビやウニなどを入れる道具です。

海中につり下げて、アワビオコシではがしたアワビを受けたり、ウキにつけ海面に浮かべて、とったアワビやウニなどを入れたりしました。



サザエフシ

船の上から箱めがねを用いて海中をのぞきながら行^みう見^つ突^つき漁^りで、サザエをとる道具です。枝^{えだわ}分^わかれした金^{かな}具^ぐでサザエをはさんでとります。海底にサザエを見つけると、サザエフシを上からサザエをお^お押^おさえつけるようにしてはさみ、船の上に取り上げます。サザエのからを痛めると価値^{かち}が下がるので、からを傷つけないように注意して突きました。



ワカメガメ

ワカメなどの海藻^{かいそう}をとるのに使います。船の上から箱めがねでのぞきながら、海底^{かいてい}のワカメなどを刈^かり取るので、長い竹の先につけられたものが多いです。



ツボ・カゴ漁

アナゴ、タコ、巻き貝^{まきかい}などの習性^{しゅうせい}を利用してとる漁法です。

ツボ・カゴ漁の道具

タコツボ

タコをとる漁具^{ぎよぐ}です。タコが穴^{あな}にひそむ性質^{せいしつ}を利用したもので、おもにマダコ漁で陶器製^{とうきせい}のつぼが多く使われていたことからこの呼び名があります。綱^{つな}にたこつぼを結びつけて海中にしずめておき、2～3日後に引き上げるとタコが入っているというしくみです。

陶器製^{せい}のつぼ型やコンクリート製^{がた}のかまぼこ型のタコツボがあります。



陶器製のタコツボ



コンクリート製のタコツボ

アナゴ^{づつ}筒

せまい穴の中を好むアナゴの習^{しゅうせい}性を利用してとる道具です。筒の中にイワシなどのえさを入れて、海底にしかけておきます。筒には「かえし」と呼ばれる中がせまくなっているふたがついています。えさのにおいにつられて筒に入ったアナゴは、この「かえし」にじゃまされて外に出ることができなくなります。



バイカゴ

バイと呼ばれる巻^まき貝をとる道具です。バイは、死んだ魚などのにおいに敏^{びんかん}感で、食べるために集まってきます。その性質を利用して、金網^{かなあみせい}製のかごの中にえさとなる魚などを入れておいてバイが入るのを待ち、引きあげてとります。



その他の道具

スズ（道具箱）

主に釣りの道具を入れる箱です。中には、釣りに使うさまざまな道具が入っています。



コバコ

小型の道具箱で、小物の釣り道具やタバコを入れます。まくら箱とも言われます。



ノリ干し用スダレ・タタミイワシ用スダレ

海苔包丁^{のりぼうちよう}で細かく切った海苔をつけて、干し海苔^ほにする道具です。

小坪では、とれたシラスを干してタタミイワシを作るためにも使われました。この簀^すの上に四角い木のわく（シラス干し用型箱^{かたばこ}など）を置き、生の海苔やシラスを枡^{ます}でくみ取って流し込み、太陽の光に当てて乾^{かわ}かします。



カグラサン

漁船^{ぎよせん}や地引き網^{じび}などを浜^{あみ}に引き上げるときに使った道具です。

中央の太い材木^{ざいもく}にあけられた穴^{あな}に2本の丸太を通し、人の力で押して回しながら船^{ふね}や網^{あみ}に取り付けた綱^{つな}を巻き上げました。安定させるため、下部に大きな石などをのせたりもしました。



ツム

繊維^{せんい}に撚^よりをかけて糸^{いと}に紡^{つむ}ぐ道具です。

1本の細い鉄の軸棒^{じくぼう}に回転力^{かいてんりよく}をはたらかす円形の車をつけたもので、軸棒の先はかぎ状になっており、そこに糸をかけて回転させることで撚りがかかります。

できた糸は、網^あを編^{あみ}んだり、修^{しゅう}理^りしたりする時に使いました。



アンバリ

アンバリ（アバリ）は「網針^{あみばり}」の意味で、網^あを編^{あみ}んだり、修^{しゅう}理^りしたりする時に使う竹針^{しゅうり}です。竹をけずって作られ、先をとがらせ、胴^{どう}の部分に中針^{ちゅう}をけずり出し、しりはU字形にけずりこんで、網を編むための糸が巻きつけられるように作られています。



す。

網目の大きさによってアンバリの大きさも異^{こと}なります。このアンバリと同じ形のシカ角でできたものが縄^{じょうもんじ}文^{だい}時代の遺跡^{いせき}から出土しています。そのころから使われていたのでしょう。

このアンバリを入れて持ち歩く入れ物がアバリ入れです。

テンビン^{ぼう}棒とカゴ

魚を運ぶ道具です。棒の中心部^{かた}を肩^{にな}に担い、前後にカゴなどをつり下げて運びます。



ビク

漁^{りよう}でとれた魚などを入れるかごです。使い方によってさまざまな大きさや形のものがあります。底の部分が円形や楕円形^{だえんけい}、あるいは方形で、口の部分が小さく、ひもを結びつけるくびれを持つものも多いです。



イケス (生け簀^す)

とれた魚を入れ、水中で生かしておくためのかごです。竹で編^あんだかごが多く用いられました。昭和40年代^{いこう}以降は、合成樹脂製^{ごうせいじゆし}が広まり、竹製イケスは少なくなっていました。



ガラス玉

海中にしかけた網^{あみ}などをつるし、その場所が分かるように目印^{め じるし}としたものです。

昔は、水に浮きやすい木や樽^{たる}などが使われましたが、ネットで包^{つつ}んだカラス製の浮玉^{せい うきだま}にかわってきました。現在はプラスチック製のものが多く使われています。



祈る・祝う

マイワイ

万祝^{まいいわい}は、網元^{あみもと}（船や網^{あみ}を持^もっていて多くの漁師^{りようし}をやとっていました）が大漁^{たいりよう}を祝^{いわ}うお祝いの席^{せき}で漁師たちにおくった着物^{も めん}です。木綿^{もめん}で作られた藍染^{あいぞめ}めのものが多く、鶴亀^{つるかめ}、松竹梅^{しょうちくばい}、七福神^{しちふくじん}などのおめでたい図柄^{ず がら}となっています。

大漁^{えんかい}を祝って開かれる宴会^{えんかい}をマイワイ・マンワイといいました。その時、引き出物^{ひきで}として配^{くば}られた半纏^{はんてん}がそのままマイワイと呼ばれるようになったのです。江戸時代^{えど じ だい}の中ごろ、千葉県^{ちば けん}の九十九里浜^{くじゅうく り はま}から始まり、東日本各地に広まりました。

漁師たちは、新年の仕事始めや神社に大漁^{ねが}のお願いをするときなど、特別なとき^{とくべつ}に万祝^{しゅつせき}を着て出席^{しゅつせき}しました。万祝^{おび}は、帯^{おび}をしめず着物の上からはおって着ます。万祝^はは漁師の晴れ着^ぎです。

小坪では、新しい船ができた時のお祝いの引き出物として配られることもあったそうです。



池子遺跡群資料館にある弥生時代の漁労具

釣り針

右の方に見えるのがシカの角を加工して作った釣り針です。池子遺跡では、さまざまな漁具が出土しました。これらの漁具は、三浦半島一帯の遺跡からも出土しています。



モリ

主にシカの角で作られた^{もりがしら}鉋頭^{ぼう}で、棒の先に取りつけて魚を突いてとります。かえしをつけて^{えもの}獲物からぬけないように作られています。



かいてんもりがしら かいてんしきりとうもり 回転鉋頭 (回転式離頭鉋)

マグロなどの大型の魚をとるために使われた鉋頭です。シカの角^{つの}で作られ、下部がツバメの尾のように開いているものは「燕^{つばめ}型離頭鉋」とも呼ばれています。鉋頭に開いているあなは縄^{なわ}ひもを通すためのもので、木などの柄^えにさしこんで使います。^{えもの}獲物に命中すると鉋頭だけがはずれて体内に残り、縄ひもを引くと鉋頭が回転してぬけなくなります。



アワビオコシ

^{いそ}磯についているアワビの下部に差しこみ、岩からはがす骨角器^{こつかくき}（シカの角などで作られた道具）です。シカの角を一定の長さに切り、先をうすくしています。これで岩にへばりついたアワビなどをはがしたと考えられています。



せきすい 石 鍾

石製の網につけるおもり（鍾）です。ねんどを焼いて作った陶製の^{とうせい}おもりもありました。



石 鍾



陶製鍾

かいじょうせいひん 櫂 状 製品（オール）

船をこぐオールのような道具です。

池子遺跡^{い せき}から出土した魚の骨には、カツオ、ブリ、マカジキ、サメなどが多く見られます。このことから船で^{おきあい}沖合に出て漁をしたと思われます。



魚類

三浦半島の^{かいしよくどうくつ}海蝕洞窟遺跡や池子遺跡などから見つかるのは、クロダイ、マダイ、カツオ、ボラ、サメなどさまざまな魚の骨です。モリ、ヤス、釣り針といった^{ぎよろうぐ}漁労具を用いて漁をしていたことが分かります。

貝類

出土した貝類を見ると、^{すなはま}砂浜の入り口ではイボキサゴ、ハマグリ、アサリ、カガミガイなどを、^{ひ がた}干潟ではマガキ、オキシジミ、オオノガイ、ウミニナなどを、^{いそ}磯ではアワビ、トコブシ、バテイラ、クマノコガイ、サザエ、スガイ、オオヘビガイなどをとっていたと思われます。

小坪の漁業あれこれ

漁師の信仰

漁師の守り神（龍宮社）

小坪の魚市場の前の埋め立て地に、海の神である龍宮社があります。この龍宮社は、小坪の漁師の守り神です。漁師たちは、龍宮さまに船の安全や大漁^{たいりょう}を祈るのです。もとは西の磯の海中にあり、明治30（1897）年に大崎の先端に祠^{ほくら}を作りました。昭和42（1967）年に新しい港ができて現在の場所に移しました。大崎には石の祠が残っています。また、龍宮の使いである亀^{かめ}も現在の社のとなりに亀大神^{かめだいじん}としてまつてあります。

毎年、正月の3日には、龍宮祭があり、船をならべてきれいにかざりたて、湾^{わん}の中を3周して、大崎の龍宮社・白滝^{しらたき}不動^{ふどう}（浪子不動^{なみこふどう}）・飯島白鬚社^{いいじましらひげしや}に海上からおまいりします。それから浜辺に向かって祝いのみかんを投げます。大漁^{たいりょう}旗^{はた}がなびく浜辺に、にぎやかな声がひびき、静かな正月の小坪の浜も、この時はとてもにぎわいます。

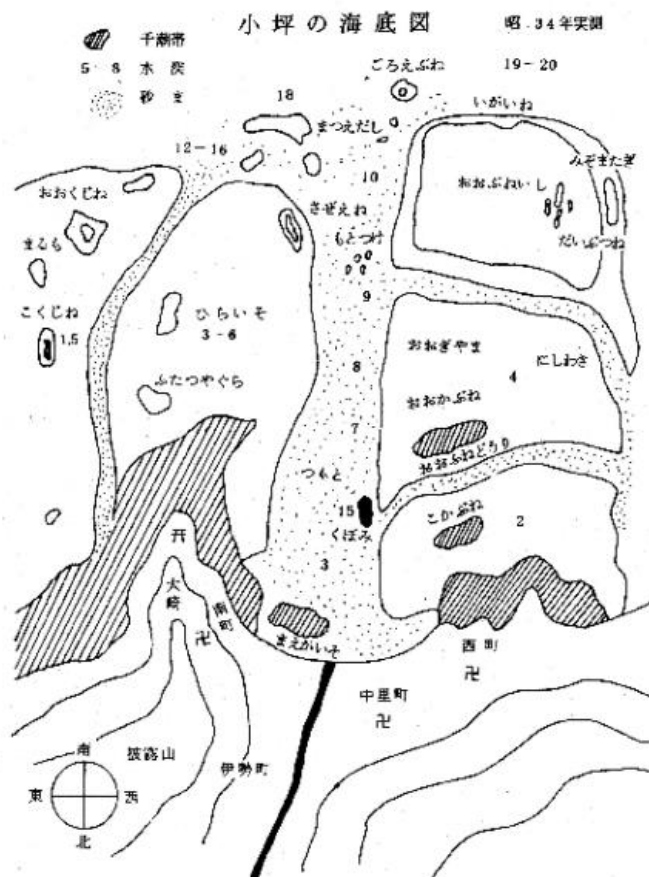


（「逗子子ども風土記 逗子教育研究会調査部 1994年」より）

小坪海岸の移り変わり

小坪海岸は、昔、鷺浦^{さぎうら}と呼ばれていました。白鷺^{しらさぎ}の舞う美しい磯つづきの砂浜だったそうです。また、大崎の沖の磯や飯島崎の沖の磯は、マダイ・ヒラメ・イセエビ・アワビ・サザエや海草が育つ豊かな漁場でした。今もワカメ^と採りがさかんです。

この小坪の海岸が大きく姿を変えたのは、昭和42（1967）年から始まった湾の埋め立てです。この埋め立てにより逗子マリーナのマンション群が建ち始めたのです。これにともない小坪港に防波堤^{ぼうはてい}もつくられました。こうして小坪の磯は、今では大崎の磯を残すだけとなってしまいました。また、砂浜も消えてしまいました。小坪は、南西の風をさえぎる岬^{みさき}がないため、正面から台風を受けなくてはなりません。ですから港に防波堤ができて、このなやみは無くなりまし



た。しかし、それと引きかえに砂浜を失い、コンクリートのテトラポットとビルの建ち並ぶ風景に変わってしまったのです。

左の図は、昭和34（1959）年の海底図です。

（鷺の浦風土記 石井清司 1979）



埋め立て前の小坪海岸

（昭和20～30年代）



網をつくろう漁師（昭和31年）



小坪漁港（昭和36年）

（「逗子子ども風土記 逗子教育研究会調査部 1994年」より）

江戸時代から明治時代にかけての漁法

江戸時代から明治時代にかけての小坪村における漁法は、大きく分けてすれば
あみりよう 網漁 ・ はえなわりよう 延縄漁 ・ つりよう 釣り漁 ・ その他の漁となります。これらの漁法の中にはすたれたものも多いですが、現在にいたるまで続いて行われているものもあります。

網漁では、エビ網はほぼ四季しきを通じて行われ、イセエビ、カサゴ、カワハギ、サザエなどがとれます。ボラ網は冬場に行われ、ボラ、セイゴ、メジナなどがかかります。その他、ヒラメ網（ヒラメ、アンコウ、ムシガレイ）、カマス網（カマス、キス）、サヨリ網（サヨリ、コノシロ）、シラス網（シラス）なども、ほそそと行われています。

延縄漁では、キス縄、アマダイ縄、カサゴ縄などが現在も行われています。

釣り漁では、サバ、アジ、タイ、カサゴ、メバルなどの一本釣りが行われます。

その他の漁では、見突き漁が行われ、アワビ、サザエ、トコブシ、タコ、ナマコなどがとられています。

（「相州小坪浦漁業史 辻井善彌・菊池邦彦 1995 年」を参考に児童向けに書き直したものです。）

小坪で行われている漁（副読本「わたしたちの逗子」2020 年版より）

☆こ がたていち あみりよう 小型定置網漁

魚の通り道に網をしかけておく漁です。現在、小坪ではあまり行われなくなっていました。イワシ、アジ、サバ、カマス、イカなどがとれます。

☆さ あみ 刺し網漁

カーテンのような網を海の底に沈めて行う漁です。イセエビ、サザエ、アワビのほか、魚もとれます。

☆み づ 見突き漁（ボウチョウ）

船の上から箱メガネで海の中をのぞき、長い棒の先についたカギやカマでサザエ、アワビ、ナマコ、天然ワカメなどをとります。

☆ようしよく 養殖 ワカメ漁

逗子海岸の沖にいかだ（40 m × 30 m）を設置し、そこにワカメの種付けをしたロープをつけて大きくなるまで養殖します。

☆その他

カゴを沈めてタコをとる漁が行われています。また、お客さんに釣りを楽しんでもらうため、船を出している漁師もいます。

わかめ漁

1. 種付け（11月～12月）

わかめの種付けは、太い種綱に種を巻き付けます。写真のように種綱の巻き方とは反対方向に種を巻いていき種が食い込まないようにします。種綱は1本40m程あるそうです。逗子海岸沖にいかだを浮かべ種綱を取り付けます。一つのいかだにロープは20～25本つけるそうです。



2. 刈り取り（2月～3月）

小坪では、養殖わかめと天然わかめを収穫していますが、養殖わかめが年間20トン、天然わかめは年間40トン収穫しているそうです。一艘の船には一回に400kg～500kgのわかめを収穫し浜にもどってきます。

3. ゆでる

刈り取ったわかめはすぐ浜でゆでます。一度にたくさんのわかめをゆでると一度に洗う量が多くなるので、ゆでる量は加減するそうです。ゆですぎるとドロドロになるので青くなったら棒を使ってすぐに湯からあげます。

4. 天日干し

干すときは、せんたくばさみではさんで2日間干します。干している最中、わかめが丸まってきたら綺麗に乾かすために手で広げてあげます。この作業を2回ほどするそうです。



（「わたしたちの逗子教師用指導資料 2020年」より）

海のくらしと道具にまつわる話

教師用参考資料として、引用した文をそのまま載せておきます。

セーリヨ師 — 釣りの名人

魚体が細長く、下顎^{したあご}が長く突き出して嘴^{くちばし}のように見えるサヨリという魚がいます。この魚のことを三浦半島の漁師はセーリヨ、セーロといいます。

いつのころからか分かりませんが、このサヨリを掛け^か釣りする独特の漁法がありました。この釣りは、きめの細かい技術を要するもので、そのためか、この釣りができる漁師は一本釣りの専業者の中でも限られた人たちで、その数も少なく、それらの釣り漁師はセーリヨ師と呼ばれていました。

三浦半島では、セーリヨ師は三浦市の菊名、横須賀市の佐島、逗子市の小坪に集中していたようですが、現在残念ながら現役のセーリヨ師はなく、名人芸を思わせる^{さお}竿さばきを見ることはできません。

サヨリ釣りの漁期は秋から冬にかけてで、北風の吹く日中におこなわれました。漁場は三浦半島の沿岸一帯の近場でした。(略)サヨリの群れを発見すると、風に船が流されないように錨^{いかり}をおろし、まず魚寄せをしました。これにはイセエビの身を小さく刻んで、それに魚油をまぶしたものを餌として試し釣りをし、サヨリの群れに餌を気づかせるのだそうです。そして、いよいよ本格的な釣りに入ります。

この釣りの一つの特色は撒^まき餌^えをすることです。しかも、この撒き餌は海面に浮かばせておかねばならないのです。そのため、コマセ(小エビに似た節足動物)に油をまぜたものを撒き餌としました。(略)サヨリが海面のコマセを食べに浮いてきたところを狙って、船上から釣り竿をふり、カットウと呼ばれる独特の釣り針に引っ掛けます。サヨリがかかると手元に引き寄せ、背後にあるトバ(ちがや製の^{むしろ}筵)にあてて、サヨリを船内に落とし、またカットウを次の目標のサヨリに投げるというぐあいです。

文章にすれば簡単なようですが、竿をふるってサヨリの鼻先にカットウにかけるのは並大抵のことではありません。もちろん、この技術の習得にはそれなりの努力を要しました。セーリヨ師は暇をみては海に藁くずを流し、それをサヨリに見立ててカットウ投げの練習をしたといいます。また、この釣りは危険をとも名合うもので、セーリヨ師の中には、カットウを眼にかけて、つぶしてしまった人もいたということです。

カットウと呼ばれる独特の釣り針は漁師が自製しました。ピアノ線をチマゲという道具を使って曲げ、その先端をヤスリで尖らせ、三本か四本の釣り針を銅線で束ね、麻糸でチメをつけるとできあがりです。このように、昔の漁師は釣り針はみな自製したということです。（略）

三浦半島を取り巻く海が今より豊かであった時代には、海辺に生きた人びとが生み出した素朴な漁や技巧的な漁など、さまざまな漁法が伝えられました。これらが時の流れと共に消え去っていくのは惜しいことです。サヨリ釣りの名人、セーリヨ師も例外ではありません。

（「ときめき探訪 三浦半島 辻井善彌著 1994 年」より）

ガラスめがねと船戦

船戦^{ふないくさ}といっても戦国時代の話ではありません。この海戦は明治 41 年 6 月 12 日に葉山沖でおこったものでした。当時の横浜貿易新報ははこの事件を「葉山沖の船戦」の見出しで次のように報じました。

「12 日相州三浦郡田越村小坪の漁夫と相州三浦郡葉山堀の内の漁夫との間に葛藤を生じ、双方数十名小舟に打ち乗りて葉山沖に落ち合い、ここに海戦を開きしが、横須賀署の耳に入りしより、直ちに数名の警官駆けつけ、双方を制止したるより、軽傷者 34 名を出したるのみにて事済みしが、その原因は従来小坪より堀内漁業組合に一定の漁業料を納め来たりしものなるが、このころ堀の内にては小坪へ無断にて料金の値上げをなせしより、しばしば不当に申し込みたるも、堀内側は頑として応ぜざるより、かかる始末に及びたりという。」（略）

小坪は古くからの漁村で、見突き漁と呼ばれる磯漁がさかんな漁村です。この漁は丸木舟ともいわれた磯船の上から水中をのぞき、長い棹や棒をふるって磯の貝類、魚類、海藻類などを突き取るものでした。この漁業では磯を漁場とするため、他村の地先の磯まで進出することが多く、小坪の見突き漁師もその例にもれず、古くから腰越、葉山、秋谷の地先へ運上金（営業税）や入漁料を支払って進出していました。

明治の世となってもさらにこの慣習は続いていて、小坪の見突き漁師は入漁料を納めて入漁していました。ところが明治 30 年代になると、小坪の見突き漁民と堀の内の漁民との間の雲行きがあやしくなってきました。

見突き漁は磯船の縁に顔を寄せ、じっと水の中に映る獲物をさがして突き取る

漁業ですが、海底を見やすくするため、海面に魚の油をたらし油膜を張るなどの工夫がされてきました。ところが明治中頃になると、より海中を見通しやすく画期的な道具が考案されたのでした。この道具とは木枠に板ガラスを張ったガラス眼鏡と呼ばれたものでした。このガラス眼鏡の出現によって、見突き漁師は海底の漁獲物を実像としてとらえることができるようになりました。それにより漁獲高を急増させたことは申すまでもありません。(略)

小坪の見突き漁民も明治 35 年ごろよりガラス眼鏡を使用するようになりました。そのため、より深い所でも操業でき、多少の波があっても操業が可能であることから出漁日数も多くなり、漁獲高が増加したことは申すまでもありません。

一方、入漁を認めていた堀の内の漁民が心中穏やかではなかったことは想像がつきます。このままガラス眼鏡の使用を認めて入漁させておくと、地先の磯資源は根こそぎ取られてしまい、磯建て網などの地元の漁にもさしつかえと考えたのです。そこで乱獲防止の立場から、入漁区域内でのガラス眼鏡の使用を禁止し、さもなくば入漁料を値上げすると通告しました。この要求に対して、小坪の見突き漁民は反発し、禁止を無視したため、ついに名島の沖合で血の雨を降らした乱闘までに発展したのでした。

片手でも保持できるガラス眼鏡という道具によって、漁民同士の流血沙汰が起こったことは不思議といえば不思議ですが、新しい漁具や漁法が導入されると、漁民間の抗争が起こることは他にも見られることでした。これが漁業という生業の特色ともいえるのでしょう。

(「ときめき探訪 三浦半島 辻井善彌著 1994 年」より)

池子遺跡

木製品、骨角製品の一大製作拠点

池子遺跡からは、弥生時代の河川の跡が見つかった。湿った土にパックされていたことで、通常では腐って分解されてしまうような木製品や骨角製品が川底から大量に発見された。それらを見てみると、製作途上のものが多く、この場所で木製品の農耕具や骨角製の漁撈具等の加工を集中的に行っていたことが明らかになった。

人びとが捕食したであろう動物の骨も多数見つかった。魚類を分析した桶泉岳二は、外洋性の表層回遊魚類－サメ類、マカジキ科、カツオ、ブリ属等－が多くを占めることを明らかにし、遺跡近くの水域ではなく、相模湾の地先～沖合海域に繰り出し、表層漁業に特化していた集団の存在を指摘した。また、海に面した洞窟遺跡は、そのような集団が遠征時の野営や天候急変の避難場所として利用した可能性を提示した。

（「特別展 洞窟遺跡を掘る 図録 神奈川県立歴史博物館 2022」より）

池子遺跡

池子遺跡は三浦半島の北西の付け根近くに位置する。長期にわたる複合遺跡だが、特にNo.1-A 地点では、弥生時代中期後半に旧河道から大量の木器・骨角器等が出土した。

漁具としては、銚頭・釣り針・ヤス・アワビオコシなどがあり、海蝕洞穴から出土するものと共通する。魚骨の分析から想定される漁獲シーズンが稲作の繁忙期と重なることから、集落内に漁業に専従する集団が存在した可能性が指摘された。

（「企画展 海にこぎ出せ！弥生人 図録 横浜市歴史博物館 2012 年」より）

回転式離頭銚とその系譜

北方の海にはトド、アザラシ、オットセイ、クジラなど各種海棲哺乳類（海獣）が多い。その海獣をとるための猟に、古くから用いられたすぐれた狩猟具が回転式離頭銚である。（略）最近まで北海道でアイヌの人たちが用いていたキテと呼ばれる回転式離頭銚である。銚先に鉄の刃先がついているが、昔はすべて鹿角などの骨製だった。

この形式の銚は獲物に命中すると、銚先が柄からはずれ、獲物の体内で銚先が回転して離脱しない仕掛けになっている。銚先には獲物をたぐりよせるロープがついている。この種の回転式離頭銚は大型の海獣猟にはたいへん有効で、北部太平洋地域に広く分布し、北方の多くの民族が海獣猟のために最近まで使っていた。その伝統はかなり古くまでさかのぼると考えられる。

北海道や青森県の貝塚では、すでに縄文時代の早期の層から海獣の遺骨とともにこの種の銚の古いタイプのものが発見されている。その後、北海道ではオホーツク文化の時期に海獣猟がさかんに営まれ、その伝統が近世アイヌに受けつがれて、キテが生み出されたわけである。

ところで、寒流域の北海道や東北地方北部に分布していた回転式離頭銚が、そこから暖流域の仙台湾付近へ南下するのは、縄文時代の中期以後のことである。南の仙台湾付近では回転式離頭銚は海獣用ではなく、むしろマグロ漁用になり、縄文時代後期末に燕形と呼ばれる大型の離頭銚が出現する。その後、弥生時代の後期には回転式離頭銚は三浦半島や山陰地方まで達し、古墳時代後期には北部九州で鉄製品がつくられるようになった。

これが、最近まで南氷洋捕鯨で使われていた離れ銚の直接の原型だということはいまだあまり知られていない。その系譜は、北の海で海獣用に用いられていた古代銚にまでさかのぼるのである。

（「日本の歴史① 日本史誕生 佐々木高明 集英社 1991年」より）

参考文献

- 逗子市文化財報告書 第15集 小坪の漁労具 逗子市教育委員会 1993
- 相州小坪浦漁業史 辻井善彌・菊池邦彦 1995 (逗子市史漁業編 採録)
- 民具の事典 河出書房新社 2008
- 逗子子ども風土記 逗子教育研究会調査部 1994
- 歴史民俗資料ノート 逗子教育研究会調査部 1996
- 鷺の浦風土記 石井清司 1979
- 逗子郷土史ノート 考える市民の会 1972
- 副読本 わたしたちの逗子 逗子市教育研究相談センター 2020
- わたしたちの逗子教師用指導資料 逗子市教育研究相談センター 2020
- 三浦半島のまつりとくらし 辻井善彌 1987
- ときめき探訪 三浦半島 辻井善彌 1994
- 特別展図録 洞窟遺跡を掘る 神奈川県立歴史博物館 2022
- 企画展図録 海にこぎ出せ！弥生人 横浜市歴史博物館 2012
- 日本の歴史① 日本史誕生 佐々木高明 集英社 1991
- 海のくらしと道具 八戸博物館 1986
- 甞る池子の歴史 かながわ考古学財団 1996

海のくらしと道具

小坪小学校資料室にある漁労具 池子遺跡群から出土した古代の漁労具

発行 2023年9月1日

編集・発行 逗子市教育研究相談センター

〒249-0005 逗子市桜山5丁目20番29号